

十五周年記念特集 「俳句進化論」

- 鼎談 高山れおな／今井聖／竹内宗一郎
- 評論 友岡子郷／中岡毅雄／依光陽子
- 街の百句

街

machi 俳句誌

No.91 2011/10



街宣言

俳味、滋味、軽み、軽妙、洒脱、飘逸、諷詠、諧謔、

達観、達意、熟達、

風雅、典雅、優美、流麗、

枯淡、透徹、円熟、ではないものを私たちは目指します。

肉体を通して得られる原初の感覚を私たちは基点に置きます。

私たちは「私」を露出させ解放することを目的とします。

今井

聖

俳句進化論

街十五周年記念特集

2011.10-11 / No.91

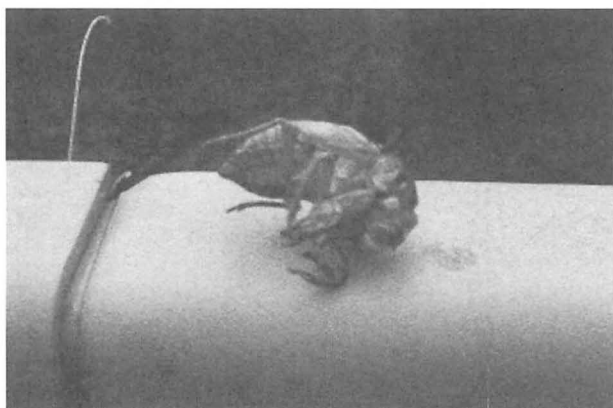
特集 I

特集 II 鼎談「俳句進化論」

街の百句

6

高山れおな 今井聖 竹内宗一郎
16
韜晦と洗練を超えて



© Kan Takechi

友岡 子郷
高山れおな
中岡 毅雄
依光 陽子

不易流行のことなど

友岡子郷

俳句退化論

中岡毅雄

にこにこ笑いながらバツハを弾く

依光陽子

二人の師から

今井 聖

石井 薔子／栗林 浩／小久保佳世子

斎藤悦子／さたあきこ／柴田千晶

50

松野苑子／藤崎幸恵／横山崩月／山下つばさ

街作家展望

68

大森 藍／紅葉栄子／伊藤容子／河野けい子

街作家自選十句

141

街十五周年記念俳句大賞発表

67

VISIBLE (43)

毎日が奇跡体験

先鋒三十

解放区

自由区

空中を見る

加藤楸邨・寺山修司

俊英特別競詠

個性の響き

ポストの見える机より (二)

武州金沢「横浜市金沢区高舟台」

花追い人

中庭

冬の杜若

未来区—今井 聖選

未来区鳥瞰 (91)

句会のお知らせ

今井 聖

今井 聖

今井 聖撰

紅葉栄子・森島裕雄 他

北大路翼・栗林 浩 他

鴉田智哉

川島謙一・館山藤右之門

金井文美・永井美智子

石井齋子

森山いほこ

渡辺幸弓

伊草節江

森 光葉

田中 圭 他

今井 聖

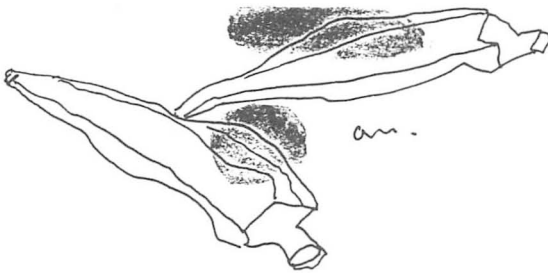
今井 聖

VISIBLE (43)

今井 聖

漕がず過ぐカヌー一艇桜桃忌
ステテコや指示代名詞ばかり言ふ
最上段に旗手や学ラン塩噴いて
犬犬犬入道雲はチャウチャウだ
遠き世を歩いてゐたる夜店の灯
猫歩くおほかた畳みたる夜店

ネジ巻いて置くネジ巻いて置く夜店
鳥の子三度追ひついてから貰ふ
唐黍の髯がだんだんカストロに
夜の秋犬の耳掻く音がする
秋日差す一頭分の敷藁に



■カット 安藤尚子

街の百句 (四季別・順不同)

今井 聖 撰

花ひらく時の無音の怒濤かな

有馬ルイ

駅までに十人抜きし春シヨール

伊草節江

鳥帰るしんと背骨のありにけり

池田義弘

引佐細江花あふれ人あふれたり

池本光子

春の水かぶかぶかぶかぶと子犬

井上さち

満開の桜や悪筆五十年

大西龍一

藤棚の下引力の強くなる

折戸恭子

超音波に九ミリの孫朧月

川島謙一

春の月王国覆ふブルーシート

木村厚子

謝る木万歳する木大黄砂

小久保佳世子

髪に春雨紙コップおりてくる

斎藤悦子

蘆の角誰のてのひらとも遊ぶ

佐藤凍虹

春寒し電子ブックに方丈記

鈴木比呂子

一億二千万の中の二初桜

鈴木八千代

種を蒔くやうに二壘手グラブトス

竹内宗一郎

春耕や牛糞の山発火する

茸地 寒

明日よりは市となる春田打つてをり

土屋みさ子

縄文の穴から遠足の足音

西澤みず季

ガーナ紙幣に百姓二人水ぬるむ

袴田知子

菜の花や海より来る転校生

松田佳津江

心臓の到着を待つ田螺かな	山下つばさ
朧月僧侶六人鮎食ぶ	横山秀雄
飛花落花活断層はこの真下	大森 藍
弁当の片寄つてゐる初霞	末次 正
アフリカの薔薇唇で触れてみる	石井 薔子
ダンサーの背骨一本夏の月	伊藤 容子
紫陽花と海を見に来て友の増ゆ	加藤小夜子
涼しさや版画の木より葉擦れの音	金井文美
グッピーの消えて液晶テレビ来る	金丸和代
初夏の一人が同じ歌	河野けいこ

百合の香に造られてゆくお葬式

葛生みもざ

褥瘡の駱駝舎も見せ子供の日

佐々木啓介

射程なる彼の八月の川渡る

佐々木ゆき子

蟻すこし飛ぶたんぽぽの絮毛曳き

佐分靖子

日曜日髪を洗ひて子を産みに

杉山文子

蓮池を隔て女子高男子高

高橋健成

骨壺が二つ隣に青りんご

高橋まみ

翡翠が排水口を見てをりぬ

館山藤右エ門

牧野先生浜豌豆が笑ったよ

たなか 游

髪洗ふ珊瑚の闇を思ひつつ

長岡悦子

緑蔭を走るケーキのやうな靴

西村 邑

白地被せ逝かせこれほど恋ひ始む

秦 鈴絵

ムームーの中の中腰波になる

藤崎幸恵

衝立のごとき嶺々鰻食ふ

藤田春香

海亀の死や頭から砂になる

古川佳子

炎天の空襲の朝誕生す

南 葉月

放課後も試験も無くて夏来たる

矢野麦州

蕎麦殻の枕夏野の父と会ふ

山田富士夫

観てゐると言ひ張る父のナイターは

山邊ゆりえ

夕立の後満席の授乳室

横山香代子

三角六個組みし六角夏鶯

渡辺幸弓

田植機の向き変ふるとき傾きぬ

井上 淳

兄妹立つ蟬の木の裏表

中庭加津昭

国道の白線ひかる野分かな

小黒 正

柿赤し檻に生まれて檻に産み

玉田憲子

秋の蜂つひにポストの中に入る

浅野糸江

鰯雲 夫散骨を諾はず

石川陽子

籠球部敬老式の椅子しまふ

大井正志

ド라마ーは軟体動物秋灯下

大竹照子

ただ歩いてくれる人ある良夜かな

尾上恵子

知らぬ事多き六十路や柿熟るる

木下はるえ

葱植うる畝の曲りがやや不満

富田はなえ

秋日和鞆二つと転院す

並木光世

ベッドからベッドに移り星月夜

西塚洋子

深呼吸百回黄葉のラサを行く

根尾 信

罌雲 平民とある嘆願書

半澤登喜恵

観覧車に亡き人ひとりづつ月夜

松野苑子

サラダバー横歩きして銀漢へ

森山いほこ

月高く過食嘔吐の予感して

やまねよしこ

チヨコレート匂ふ聖夜のナース来る

天野沙子

三日ゐて三日共雪三日画く	安藤尚子
また冬が来ました井戸の蓋の上	石田義風
耀のあと赤き氷の流れゆく	上田貴美子
狐火や紐を掴めば妻が引く	植田航
改札よりバス停までの雪払ふ	梅元あき子
白鳥のこぼせし土の日当たれり	大類つとむ
冬麗や十年分の注射痕	片山いづみ
空中に新郎新婦皿に牡蠣	北大路翼
冬賞与二、二ヶ月犬を買ふ	草野早苗
鯨撃ち姓は遠見といひにける	栗林浩

恋らしきものの始めの雪礫

小泉ゆき江

ジーンズに雲の斑のある暖炉かな

興梠 隆

目に見えぬ猫が炬燵に居るごとし

斎藤 絢子

飛行船十一月の神谷バー

さたあきこ

全人類を罵倒し赤き毛皮行く

柴田 千晶

十二月八日を過ぎし夜汽車かな

杉山 愉一

除雪車のあとの葬の列短か

竹中 瞭

逃げ道を照らす寒夜の工事灯

田中 圭

術後十年巡り来し冬犇と抱く

土居 恒二

指の狐壁に映して風の夜は

中江 智子

濯ぎ物風の形に凍りけり

中村ノブコ

ティーバッグの糸より湯ざめ始まりぬ

穂阪幹子

ベトナムの青年銀杏分けくれし

三井澄子

冬蒲公英襦袢といふもの無くなりぬ

紅葉栄子

古曆しるしなき日の記憶かな

森 光葉

マスクには忘るる力ありにけり

森島裕雄

ムンク展出て裸木の迫り来る

横山崩月

雪達磨融けて怪人角に立つ

吉岡建夫

雪の橋をヤマ去る一張羅の家族

野宮猛夫

棒で突く一度に百体茶毘の犬

西田四万十

毎日が奇跡体験

今井 聖

正岡子規歿後百年を経た頃、子規に関しての論議を多く目にした。

一〇年前のさまざまな企画を振り返ってみた。

歿後百年という記念碑的な意味もさることながら、子規が俳句にもたらした写生という方法についての論議もさまざまな場で目をひいたのである。

その中のいくつかを挙げてみたい。

「俳句研究」二〇〇一年一月号、「俳句発見（一）方法の自覚」の中で坪内稔典氏は、「写生」について、方法としての自覚が失われている現状を説く。

写生を俳句に持ち込んだ正岡子規においては、写生はあきらかに自覚された方法だった。個人の眼で対象をとらえる方法であり、また、発想や表現の月並みを破る方法であった。ところが右のコピー（写生の深化と新化）を探るといような総合誌のキャッチコピー注・今井）においては写生は俳句の同義語になっており、方法とし

ての自覚が消えている。

同年四月号「俳句」の「現代俳句時評」で島田牙城氏は、写生という語の用いられ方の曖昧さを指摘し、それに代わる言葉を見つけようと提言する。

（我々は写生という方法に、剥ぎ取れないほどの意味を被せてしまったのである。（中略）汲々と写生という語にしがみつくと止そうではないか。「写生」という言葉は、もう十二分に役目を果たしたのであり、すでに疲弊しきっている。これ以上この言葉をこねくり回すのは、「写生」の悲劇（喜劇？）だ。）

同年九月号「俳壇」では「正岡子規のすべて」を特集し、その中で坪内稔典、夏井いつき、村上護の各氏が座談会で子規の写生と虚子の写生の違いを論じている。

また二〇〇二年一月号「俳壇」の「俳壇時評」では宮坂静生氏が、三氏の座談会の内容について異論を唱えている。

写生というのはフィクションの世界であると理解したほうがいいという鼎談での坪内発言に関して、宮坂氏は、〈意図は理解できるが、フィクションということばかりは、子規が感じていた対象に向かうよろこびやときめきが感じられない〉とし、〈子規が写生を推し進めた究極は、先人の芭蕉とも後の虚子とも違う温かくて、崇高

な「精神的なもの」を獲得したと考えている。」と述べる。

それぞれの論に僕は首肯できる。

「写生」はフィクションだという坪内氏の意見はよくわかる。そもそも表現というものはフィクションであるというような大前提をもちだすまでもなく、「写生」を花鳥諷詠と同義語にしたのは虚子であり、花鳥諷詠というのは、俳句的情趣の枠を設定することであったから、この点だけでも花鳥諷詠がフィクションであることは自明の理である。

フィクションという言葉に抵抗を覚える宮坂氏の意見も頷ける。子規の秀句の中にはフィクションという言葉のイメージを超えた世界が感じられるからだ。

「写生」という概念が多義に用いられてきて、もはや疲弊し切っているという島田氏の意見もよくわかる。

島田氏と同様のことを感じる僕は、自分の句作りの基盤と考える。「写生」を「視覚的描写」と呼んでいる。

「写生」というのは、「実際の有のままを写す」という子規の新しい提唱であったのだが、「写生」が子規の思っているように作品化されたことは、子規自身の実践を除いてはほとんどなかったと僕は思う。否、子規自身ですら、あの膨大な句数のほとんどは陳腐な作品であった。

「写生」は現代でも有効かという論点は、子規が方法として示した「写生」はどういう理解を得て、どこまで実践されたのかという論点に重なっていく。

ここでは僕の子規理解を示そうと思う。僕の子規理解は、実践的方法としての「写生」理解である。洋画家中村不折からヒントを得た「写生」が、子規の方法としてひとり歩きを始めたように、僕自身の「写生」が新しい方法としての意義をもてば、その時点で、子規が何を考へ何を言ったかはさしたる意味を持たなくなる。

僕が子規の句の「写生」から受け取る最大のヒントは「気づく」ということである。

ひとは一日に何万カットもの視覚的場面に遭遇している。

一秒のうちにすら、映像は動き、見える角度は瞬時に変化してゆく。

「実際のありのままを写す」チャンスは日に何万回も存在するのだ。もちろんどのカットも「詩」になるわけではない。厳密な意味で「詩」になるのは新しいカットだけである。新しいカットとはこれまで切り取られなかったカットのこと。元になるカットが無数に存在するのだから、新しいカットもまた銀河系の星のように、尽きせ

ず存在している。

尽きせず存在している周辺の「詩」に僕らはどうして気づかないのか。

それは、無限のカットの中から、無意識のうちに、頭にインプットされた情趣にかなうカットだけを選択しているからである。

僕らが俳句になる視覚的風景として記憶しているのは、従来美しいとされたり、情趣をもっているとされたりしたカットである。

それ以外は、頭のコンピューターが除外している。つまり見ているのに気づいていないのである。

そういう頭のコンピューターを先入観と呼ぶ。眼に入れたはずのカットの99・9パーセントが記憶の外に瞬時に捨てられてゆく。

社会的人間としての僕らは、環境に影響されて自我形成を行う。美しいもの、汚いもの、詩になる風景、ならない風景の判断基準の自動制御が脳を支配している。自動制御は、社会環境即ち他者によって「我れ」の中に据えられたものだ。自分で意識して形成した自分などというものはないのだから。

その自動制御を自分で取り去ることができればそれは奇跡であり、それができる人間を天才と呼ぶが、普通の

ひとにも自動制御をはずせるチャンスが訪れる。

それは自分と風景との切実な出会いを意識した瞬間である。言い換えれば、そういう出会いを意識せざるを得ない状況に置かれた場合、ひとは自動制御から自由になる。

ガラス戸の外に据ゑたる鳥籠のブリキの屋根に月映る見ゆ

小底にかくれて月の見えざるをひと目見むとみざれど見えず

照る月の位置かはりけむ鳥籠の屋根に映りし影なくなりぬ

齋藤茂吉が「短歌に於ける写生の説」の中で絶賛している子規の作品である。鳥籠のブリキの屋根は、美的でも風流でもなんでもない。また、鳥籠の屋根に映った月影がなくなつたということがどれほど特殊な感興をもたらす事象であろうか。このようなカットは通常無意識のうちに「平凡」即ち「美的ならざるもの」と判断され、捨てられる何万カットの方に入る。

それに「気づく」こと、つまり頭の自動制御がはずれたのは、子規自身の状況の異常さに拠っている。

ひとは眼という窓を通して己れの存在を確認している。「見える」ことは「生きている」ことなのだ。子規

は自分の少ない余命を意識したとき、眼という窓に映る限られた空間のカットのの中のいくつかに、己れの生を必死で確認しようとする。

対象への己れの「生」の投影というところ、観念的な言い方に思えるかも知れないが、そうではない。もうすぐこの世から消えていく者の切実で必死な、対象へのマーケティング（匂い付け）なのだ。

（これらは正岡子規の歌で、一読平淡な歌であるが、いかに鮮やかに子規の生が写されているか、そしていかに自然で真実で、あくどい叫喚と自然の故意の修正がないか、それらを静かに考えればよい。さうしたら写生の味もすこしはわかってくる。）
と茂吉が書いている。

ここでいう「生が写されている」は「実相観入」に至る精神論として、島田氏が擲論している。島田氏は或る意味では正しい。先入観のインプットをはずす糸口、すなわち視覚に映る風景との一回性の出会いを意識することが子規の「写生」の本質であることに、茂吉は直感的には気づいていたが、その「直感」を説明することができず、「実相観入」というような精神論を示さざるを得なくなつたのだ。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとゞ

かざりけり

も同様。従来の情趣の設定がないと「感動」がないと考えるひとはこの短歌を鑑賞できない。これも捨て去られるはずのカットの中から「気づく」ことで拾いあげられる視点である。

鶏頭の十四五本もありぬべし

鶏頭ノマダイトケナキ野分力ナ

これらは子規庵の庭に咲いている同一の鶏頭である。この鶏頭が示すものは、今日の伝統俳句の作り方の定番になつている「本意」とはまったく別の代物である。この鶏頭はたまたま子規の寝ている位置から視界に入った対象に過ぎない。鳥籠のブリキの屋根と同じ一カットの切実さを示している。それ以上でもそれ以下でもない。その切実さの前には「本意」など作者にとって何の意味も持たない。インプットされた自己の先入観をはずしてまっさらな眼で対象をとらえること、そこに対象との一回性の出会いがあり、自己の生のリアリティが存在したのだ。

毎日瞬時瞬時に展開する何万のカットの中の或るひとつを、僕らは「気づいて」拾い上げることができるか。

この極めて簡単な、それでいて奇跡に近い試みの中に、「写生」の可能性は無限に広がっている。

空中を見る 90号を読む

鴉田 智哉

伐られたる樹の香の中の花薺

松野 苑子

樹の香の中の、というから、この薺の花は、樹のにおいの成分であるかのように、あたりにちらちらちら、と広がっているのだろう。伐られた樹の生なおいの中に、それとは別の植物が一体となり、あたりの空気にとけこんでいる。

無花果や隣と同じチャイム鳴る

森山いほこ

無花果の木というもの、そのものは静かである。そして無花果の実そのものもまた、限りなく静かである。人のような無花果の実は、人の家で人に食べられる。この家に自分という人がいるように、隣の家にもまた、だれかという人がいて……、などと思っていると、この家と全く同じ、聞き覚えのあるチャイムが鳴った。あ、同じだと気づく。

同じであるのに家は二つ、人も二人。

川底に砂鉄の波紋花の冷

渡辺 幸弓

水底に見える砂鉄の黒い筋は、あるリズムをもった流れをなして曲がっている。その曲がりに沿って心も、落ち着いていく、ひんやりと白い花のころだ。

たわいなき吾が名の由来南風

上田貴美子

たわいなき、とはいっているものの、何かちよつとした由来がありそうだなと感じるのは、南風、だからだろう。名の由来であれば、いい話であるには違いない。

ブラインドの横編写る冷蔵庫

梅元あき子

つるりとした、きれいな電気冷蔵庫である。まるで模様であるかのようにくつきりと写っている横縞。夏の、気持ちのいい景。

ががんぼのリズム張りつく夜の体

大嶋 邦子

かくん、かくん、と障子とか、壁とかにあたっては跳ねかえる、あのががんぼの動き。同じ部屋にいるうち、いつしかその動きに自分が重なっていったのだ。張りつく、というほどに、作者の心への影響は大きかった。

春空へチューバ向きをり疵だらけ 片山いづみ

音は空気の震えであると、頭はでなく体でわからせてくれる楽器がチューバだ。春のくすんだ空に深々と響くチューバの音。体の鈍いところへぶうつと響く。春の光を浴びているその胴体は、よく見れば疵だらけ。寂しくも頼もしいチューバの姿。

代田の泥胸ポケットの釦にも 寺田 達雄

胸ポケットの釦、という一点を表に出したことで、人の全体が、そして代田の風景が、広がってくる。シャツはきつと灰色だ。

水にとけるみくじを買ってサングラス 栗林 浩

水にとける神籤、のことを私は知らなかったが、なんにせよ、消えてしまう紙だ。もちろん書かれていた文字とも消えてしまうのだ。そんなはかなさに、サングラスが重なる。サングラスもまた、はかない道具……。

青葉して左側だけ出る涙 小久保佳世子

目に涙があるらしいことが、その目の感じでわかることがある。自分の目のその片方だけ、涙の出ているのがわかる。移り変わる季節の中、青葉のひろがりの中で、自分の

その目の位置がわかる。自分のいることの不思議さや頼りのなさは、その位置にある。

火星見て菜の花畑に猫とゐる 杉山 文子

菜の花畑は、その一帯のすべてである。つまり、ほかに何もない菜の花畑の空間ということ。その空間に一つの赤い点があつて、それが火星だ。猫は半分人のようで、自分のそばにいて、だからこそ特別な夜なのだ。

掴めさうな飛行機並び梅雨に入る 石井 白樹

これって、こんな大きさだったっけ。とか、思ったよりもなんだか小さいな、とか。そういつたことを、建物とか、乗り物に感じることもある。梅雨に入る、でその感覚を納得させてくれた。

空中に蛇の目のある順路かな 金丸 和代

順路、というものは空中にあるものにちがいない。それは勘のようなもので、つまり、ひとりでにそちらへと体が進んでいくような性質のものだ。なぜそちらへと進んでゆくのか。矢印が書かれているからではない。空中の蛇の目が、じつとこちらを見ているからである。

未来区鳥瞰（九一）

今井 聖

青時雨姫と書かれし外廁

田中 圭

姫という文字を意外なところで発見したものである。言葉は思いもよらないところで脈々と生きている。下ネタの笑いオチなどではなく田舎の片隅で現代に生きている言葉の真面目な採取の句である。

投函のあとの空つぼ桐の花

井上 郁代

投函のあと何が空つぼになるのか。自分である。投函のあとのホッとした感じが桐の花に触発されてよく出ている。

食ぶる不安食べぬ無念やミニトマト

坂東 文枝

原発関連の句ではなからう。ダイエットのことでない

か。それにしてもミニトマトくらいでカロリー計算かと思うが、日常の積み重ねが体重減少につながるとすればその気持を笑えない。

燕の如きライバルかつてあし

館山藤右工門

この句の場合、燕はつばくろと読む。かつてのライバルを身が締まって俊敏な燕に喩えた。ライバル讚といつてもいい。好敵手と言い換えるにふさわしいライバルである。ライバルを讚えることによってそのときの自分も肯定しながら回顧している。奥行のある句である。

海紅くして朝顔のしほみけり

山下つばさ

「しほみけり」で句が終るからここがこの句の核。テーマは何か苦々しさのようなものになる。海の色は赤潮か朝焼けか。ここには何か倦怠感のような気分がある。この作者の今回のどの句にもそういう気分が見える。

七月の風の重さを測りぬる

大塚 俊子

普段だと七月がただのムードに見える。今は風が運んでくるものを考えてしまうのだ。そういう意味ではこの句、時事的な句と言える。作者が掛川在であると知ればなおさ

らのこと。

表札のかすかに読める薔薇の門

永井美智子

薄れて読みにくいという角度よりかすかに読めると言う方が表現が積極的になり見ている文字が際立つてくる感じがある。薔薇に囲まれた夏館の風情である。

紫の花のみ束ね梅雨の町

木下はるえ

梅雨の町の中で紫色の花束を抱いている。花の名前も花束を持つ理由も言わない。ただ梅雨の空間と紫との対照。それだけで俳句は必要十分条件を満たしている。

メロン截つて王妃の餐のごと灯す

小峰八重子

メロンを食べることでこんなにおしゃれな思ひになれるとはほんとうに童心の所産である。作者はメロンを大好きなのだ。それが伝わってくる。

救急車洗はれてゐて空高く

長野 一実

白と青の対照。これも色彩の句だ。救急車の意味はこの句の意図の外。

羅や町名で呼ぶ師匠名

宮田 絵里

神保町の、宝町の、町の下に「の」をつけて呼ぶのだから。ヤクザ映画でもこんな感じ。ちよつと粋でカッコいい。

俳誌の主筆は雑誌の名前で呼ばれたらどうか。「街の」「ホトトギスの」なんちゃって。

驟雨二度通過点滴受くる間に

根尾 信

一時間程度だろうか。点滴が終るまでに驟雨が二度通りすぎた。自然と肉体との関りが切ない状況で生かされている。

猛暑の日南スーダン独立す

太田 亮子

南スーダンという国の独立を初めて知った。独立の燃え立つようなエネルギーが猛暑の日と重なって強烈な一句となった。

海鳴りや月の丸みの膝小僧

川島 謙一

膝小僧の丸みを月に喩えたのは新鮮。考えてみれば半月板という言葉もあるのだからイメージとしてはあるのだから。海鳴りと併せることで青春回顧、郷愁の一句となつ

た。

向日葵の空の下なる難破船

前塚 嘉一

童話のような物語が始まる句。まず重心があつてこんな句が生まれる。

そよ風やミファソミファソと百日紅 井上 さち

軽い口調の句。百日紅がもっている感じをソフトに演出した。

狸出て消ゆ真夏のキャンパスに 真弓 大佑

都市部の大学が手狭になり地方に移動するところという風景が現れる。動物にとつての自然環境の変化などを思うと楽しくてちよつと哀しい風景ではある。

蛇のごと手をすべりゆく岩清水 東 月人

水の迸りを蛇に喩えたのは新鮮。ニーチェの『ツアラツストラかく語りき』を思った。

緑蔭にヨガ太極拳スクワット 中村 町子

朝、公園に行くと多くの人が思い思いに運動をしている

る。そういう風景を詠んだ。みな健康を願っている。しかしいつかは死なねばならない。死ぬまでは迷惑がからぬ程度に健康にという願い。びんびんころりと言うのは最近多く耳にする言葉だ。

魂抜けの木偶のごとくに熱帯夜 畠山 尚

魂抜けの木偶とはよく言つたものだ。熱帯夜のどうにもならない放心の態を言い得ている。

青梅三つまごとのデザートに 神谷 幸代

素直な句。デザートがあるとは豪華なままごとはある。

茅の輪からひとすち抜いて病む人に 鈴木かつ子

そうか、こんな配慮があつたのだと思わせる。作者のころづかいが伝わってくる。

ガスレンジ一日使はず胡瓜もみ 中田ミチコ

家に居て三食食べて、ガスレンジを一日使わない日があるのだ。ただ側から言うと胡瓜もみの胡瓜もいし、そんな食事の一日があるのも魅力。作る側は大変なのかな。

鈴なりの李の木まで里山なり

萩田 緑

里山の起点が李の木であるという発想が独特。機智だが現実の「もの」に即した把握となっている。

蚯蚓踏めば蛇となりたり原子の灯

富澤 政行

放射能のせいで昆虫が巨大になった島という映画があつたように記憶している。蚯蚓がたちまち蛇になるのも同じ発想。あなたが空想ではないような気がする現実が怖ろしい。

桜から離れる湯から上る如

高安 春蘭

桜の下にいと上気してまるで湯の中にいる気分。離れると湯から上った気分だという句。桜の絢爛な様子が捉えられている。

今月から未来区に新人の方が増えた。うれしいことだ。

街は年齢や句歴を俳句の評価に入れない。そのときその一句が勝負である。僕は中学生のときに俳句を始めた。若い方は感性が鋭いねなどと年配の方に言われると技術だってあなたには負けませんよと返した。失敗を怖れる消極性だ

けが創作者をダメにする。冒険心や挑戦の気持だけが道を切り拓く。ペテランも初心者も主宰も同じ土俵でがつぶり四つだ。

他に惹かれた句

生家とは素足で正座するところ

森 光葉

首筋を真黒に焼き夫帰る

富田はなえ

率直でありし姑ところてん

神尾 紅美

夏暁の頬に触れたる猫の鼻

金井 文美

かき氷天然水と品書きに

葛生みもぞ

緑なす東西バスは買きて

加藤小夜子

白に替へまた零からのレース編み

吉永 興子

びいどろや天香具山みえてくる

袴田 知子

翼竜の骨のごとくに夜の新樹

伊藤 早苗

救急車洗はれてゐて空高し

長野 一実

紫陽花や竜の口より伏流水

平田海苔子

葛菓子のように固まり海月の死

岡田とく子

オプシヨンの鮑が一つ夫婦旅

佐々木啓介

後記



■街十五周年記念号をお届けします。特集「俳句進化論」の鼎談には高山れおな氏をお迎えし、俳句の現在と過去、そしてこれからを広い視野で語っていただきました。大変お忙しい中、横浜まで足をお運びいただきありがとうございます。

■「街の百句」は創刊から今日までの街宣言の一つの成果であると思います。そして新しい街宣言の元に私たちが進化し続けてゆきたいです。「私たちの俳句よ！」この愛の言葉を新街宣言にも感じています。

■表紙は今回も茸地寒さんのデザインです。自選十句のカットは安藤尚子さん、お二人ともありがとうございます。(晶)

■「ずつしりと厚い記念号です。特集「俳句進化論」の評論を、友岡子郷氏、中岡毅雄氏、依光陽子氏に、それぞれの角度で論じていただきました。心より御礼申しあげます。俳句とは何かを考える契機を与えていただいたように思います。

■同人作品評は今号から三回に亘り、「雲一

編集長の鴉田智哉氏にお願い致しました。「空中を見る」という魅力的なタイトルでも楽しみます。

■街の百句、会員の自選十句は壮観です。また、街十五周年記念俳句大賞には、何と七十二編もの応募があり(速報67頁)、街の仲間の俳句に対する情熱を肌で感じました。街十五周年の今年は、日本にとって大変な年となりましたが、前へ進むしかありません。原初の間を基点に「街」という翼をひろげて。(苑)

■人間の十五歳と結社の十五周年を同じように語ることはできませんが、新しくなった「街宣言」に創刊から十五年経った「街」の年齢を思います。以前の「街宣言」がいわば高らかな産声だとしたら、今回の「街宣言」には変声されたような語勢があり、培ってきた「街」俳句を更に鍛える覚悟のトーンを感じました。記念号のテーマは「俳句進化論」。これもまた難しいテーマであり、だから逆に挑み甲斐のあるテーマだったように思います。3・11と歴史に刻まれる厳しい年に十五歳になった「街」の健康を心から喜びあいたいと思います。(佳)

街HP <http://www.014.upps.onet.ne.jp/>

haku-machi/index.html

■「街」入会規定

*「街」購読の申し込みをした方は

「街」会員とみなします。

*購読希望の方は左記の口座に年会費六千円を一括振り込んで下さい。

〈振替〉00200-2-12743

加入者名 街発行所

*ご不明な点は発行所まで直接お問い合わせ下さい。

街 第九十一号(十・十一月号)

平成二十三年十月一日発行・隔月刊

編集・発行人 今井 聖

街発行所

〒235-0045

横浜市磯子区洋光台四-三四-一五

☎045(832)3477

振替 00200-2-12743

加入者名 街発行所

年会費 六千円(前納)